



1日目

I はじめに

分科会基調は、研究課題と討議課題をもとに提案された。基本的には文章に沿うような方で発言がなされ、報告・討議にはいった。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—③

思いを共有し、共に学び合う(香川県同教)

—主な質疑と意見—

鹿児島 報告者2人とけんさんとの関係は？

報告者 人権・同和教育主任であり、もう一人が4年間担任である。

鹿児島 小中一貫校としての中学校との引き継ぎは？

報告者 教育計画を見直し、9年間を見通す。中学校からの乗り入れ授業、小学校と特別支援教育担任が英語の授業に行っている。複数の学校が少しずつ合併しているので状況が異なるが、情報共有はできている。

香川 職員が別々。本年度から授業交流を進めている。今の小学生の状況を知る。子どもどうしの交流に先生方も参加している。

鹿児島 鹿児島も小中一貫校の動きがある。メリットもあるが、デメリットもあるのではないかな？

報告者 中学校の先生とのすり合わせの部分で大変な部分がある。子どもの成長の過程が見ることができるのがよかった。(5年生～中3までの)校種間のつながりはよかったが、異動などにするとシステム上のデメリットがあるのではないかな？

鹿児島 誠実な様子につながる。被差別の側が差別の側に立ち向かうという姿があるが、けんさんの変容が重なる。周囲(学級社会)が変わる姿と教師の関わりを知りたい。おうち交流館との関わりということは被差別部落がある周囲の差別心があるのではないかな？

報告者 安心して意見が言える場づくり。子どもたちの声から解決に向かわせることで成長がある。教師は待つという姿勢。子どもから出る解決策を出している。交流館は隣保館。福祉と人権を守るま

ちづくりの施設になっている。地域福祉の拠点として11000人を超える利用。地区の子どもたちの学力向上だけでなく、だれでも学びの場になっている。

鹿児島 自分が赴任している中学校 1 学年 240 名。3つの小学校から集まる。「スクールカースト」女の子が多いが、圧力を受けたりするトラブル。小学校時代は同じ学校だったのに、6 学級の中で話が減る。小中一貫の中ではどうなるかな？

香川 この10年びっくり過ぎるくらいトラブルがない。隣保館。出身者が散在している。地域的には差別的な感情はなくなっている。デメリットは人間関係が変わらない、出会いのダイナミズムみたいなものはないが、新たな教師との出会いというところが不安だが、今からの取り組みに期待している。

協力者 交流館を含めての関係性は重要。送り出す側としての責任などを考えるが、小中一貫校を出た後の子ども達の取組。

兵庫 トラブルありながらあったかいクラスだな。そのために行った人権学習はないかな？

報告者 道徳科の時間になるが、振り返りの中で自分自身と置き換える。SSTという部分の取組。共有する。仲間づくりの活動が復活している。香川県「みんなで進める人権・同和教育」というのが出ていて活用している。

協力者 道徳科という教科指導で終わらない。

香川 先生方がよりより関係性をつくる。子どもの背景を把握し、心理的な安定を起し、人権感覚を育むことができている。子どもたち同士で解決する姿。積み重ねることによりよい人間関係をつくる。

鹿児島 けんさん自身が自分のことをどう思っているかな？けんさんの特性について話す機会があったのかな？自分も15年の経験から。通常学級の中で特性のある子どもが仲間に入りづらいという状況がある。

報告者 けんさん自身の中にも安心して言い合える仲間が増えていと思う。周囲は幼稚園から変わらないのでよく理解していて否定する子どもはいない。けんさんが特別支援学級にいることを聞かれたときに説明したことはある。「そんなことあるかも」という反応だった。みんなと一緒にだよ。教師自身も考えながら伝えていこう。

鹿児島 交流学級の先生も重要だと思っている。

—報告2—④

友だちと話したい ～私の本当の気持ち～

(大阪市人教)

—主な質疑と意見—

鹿児島 「心のノート」がキーポイントになっている。活用の仕方と教師が返す際の工夫は？

報告者 「心のノート」の取組を6年生の担任の先生が実践をみた。担任の先生だけに伝えたいということがすごく詳しく書いてあった。それで実践した。週1回。全員に違うことで返事しよう。その子にあった言葉を選んだ。教師の思いを伝えたい

た。ノートの中で交流が暮らしをつかみ深まった。
大阪府 先生と子どもたちの間で素直に書きたいから、声に出したい！という実践もあったか。学級の中で意見が出てきた。本音が語られる(共有されたか)

報告者 別な児童の例。「勉強が嫌いです」という繰り返しやり取りした子。家で「勉強し！」といわれるのがプレッシャーだった。社会科への興味から、算数のわからないところの解決、漢字もと発展した。中学校の状況を聞くと変わっていった。ある男の子の例では「周りが友だちに合わせてしまって勉強ができない。」などの悩みを交流したことがあった。

鹿児島 ①学級の人数構成、②サキさんが自信をつけたターニングポイント

報告者 ① 36名 ② 夏休みにお姉ちゃんと繰り返し練習している。中学校に向けてやらないといけないという強い意志を感じた。彼女の中で成し遂げたいという思いがあった。

鹿児島 本当の気持ちということが大切。大阪府人教「今、どんな気持ち」というカードを使っている。子どもの感情を捉えることが重要。

報告者 カードは使っていない。子どもたちのトラブルをしっかり考える。気持ちを伝える。

協力者 言語化できない子どもに有効。「本当の気持ち」に子どもも教員も寄り添えるか。共有して次の一步を踏み出すことの実践をお聞かせください。

討議

鹿児島 場面緘黙の児童を持った経験。日記の実践。4~5人で班ノートを書いていた。苦しさをノートに書いて共有する。本音がいくつか出ていたように思う。子どもと向き合う姿に改めて取組んでいく。

協力者 子どもの本音に迫るような実践をご紹介ください。

大阪 カードを活用している。伝える体験「言葉にしてみる」という振り返り活動を行う。

鹿児島 「区別」と「差別」ということについてご教示ください。

協力者 この件については、総括討論で考えたい。

香川 暴言をはく児童もいる。話しかける。後押しできる声掛け。

神奈川 すごい負担ではないですか？どの時間に行っているのか。

報告者 端末で交換している。後追いができる。場面緘黙だった子が、美容室に勤めていた時の出会い。農業従事者に今はなっている。わかってくれる人がいるということが大切なんだと再確認できた。

報告者 空き時間に書いてとかしている。短い文章で効率的にと思っていたが、教師自身がよい状況の時に書こうと思っている。急に話を振られて話すことが難しいと思う。職場体験での3人の姿に成長の証を感じ、順調に成長するのではないかと感じた。

Ⅲ 総括討論

協力者 教師と子どもの思いの共有、子どもの本音をいかに引き出すかというところで実践を出し合っていたきたい。

神奈川 区別と差別の違い。区別は違いで、差別はそこに差をつけること。

未来社会をたくましく生きる。子どもの語り合う場を確保する中でそれぞれの思いを共有する。互いに対話をしないと人権を押し量ることができないと思う。対話をするためには安心感が欠かせない。文字でもそう。絶対に見せない、出さなくてもいいよといって実践している。レポートに感動した。こうした方がいいんじゃないかという勝手な大人のフィルターで見てしまう。子どもの思いの中で、未来で健やかに過ごすのか、再認識することが大切。続かない、やめてしまう子が増えている。好きなことで楽しみながら続けていけるようになってほしいと考える機会になった。ここで終わらせるのではなく地域に発信していきたい。

大阪 学校はもう一度分けるということに敏感にならないといけないと思う。行動が伴うことが差別。今の時代これは区別だからといいながら差別しているんじゃないかと思う。インクルージョンが言われている中、分断になっていないか。今日も、同一化を求めていたんだと感じた。頑張らせてる、マイノリティをがんばらせていることを振り返らないといけない。悪意なくという言葉からもマジョリティが変容する必要があると思う。

研究大会は発表ではなく、報告のはず。うまくいかなかったことも含めて報告されないといけない。実践成果を求めることが差別につながっているのではと思う。報告の中で周りの変容が見えづらかったので教えてほしい。

報告者(大阪) クラスの中もコロナ明けで交流が少なかった。子どもたち自身もどう交流すればいいかわからない中だった。クラスの中にサキがいる中で、自分たち(教師)が発信しなければならない。サキができないからではなくて、できる人が補っていくなどして、今自分ができることをやっていくように子どもが変わっていった。

協力者 本音を引き出す取り組みを教えてほしい。

鹿児島 41年目。小中高教えてきた。多田さん、井関さんの子どもに対する思いが伝わった。一昨日ハンセン病について授業で話をした。水平社宣言「人の世に熱あれ、人間に光あれ」そのものだと思う。感想をよむと、ちゃんと伝わっていた。若い先生方、うまく伝えようではなくて、思いが大切。

鹿児島 2つの視点で発言します。①サキさんの言葉を奪ったのは何だったか。父だけでなく、学校ではないかなと思って読んだ。声を出すことの抵抗が薄らいでとあった「抵抗」は、頑張らなくてはいけないと強いているからでは。②差別が介在していることが見えない。奄美で兄が島を出たが、方言を馬鹿にされ帰ってきた。その子たちはどうしていじめられないといけないのと感じた。奄美の歴史・文化を学ぶ学習をすると、子どもたちは「奄美差別

は作られているんだ。良さを知って行ってほしい。」
と言う。レポートで伝えきれなかった自分の生き方
にまで見つめることを明日も期待したい。

鹿児島 子どもたちの本音を強引に引き出そうと
してしまっていた。それを気付かせてくれるのが研
究大会。我々教師自身が何を学んだかが大切。も
う一回子どもの側に立って営みをしていく。

協力者 教える側という立場をとってしまいがち。
実際は子どもたちの背景から学んでいることが多
い。

鹿児島 本音は引き出せているのかなと思う。先
輩たちが言ってきた通り、自分のことを語らないと
いけないと思う。自分の父が亡くなって、学校で子
どもたちが「先生元気がないね」と。いつもだった
らため口だったのに。

1年生の頃からかかわってくれている支援学級の
子。理科準備室にきて「瀬戸口はいるか！」と私の
もとに来る。どうしたのと聞いても「別に！」。世間
話をする、「先生今心配事あるでしょ。」父の容態
が悪いことを言うと「ふーん」という。引き出すの
ではない。

協力者 子どもを大人と分けずに人として見る。ま
さしく人間

香川 教育実習で出会った支援学級の子たちと年
賀状のやり取りをしてもう40歳になったが「年賀
状くれるのはせんせいだけなんだ」という。その教
え子が逮捕された。ネットではさらされていて、震
えるような気持だった。気になる子にはこちらから
積極的に話すだとか、背景を想像する教員であり
たい。

鹿児島 特別支援学級の担任で、登校できない6
年生の子どもがいる。1時間だけ登校している。欲
を持ってしまう。1時間出来たら次は2時間、給食
まで…と保護者と話した。頑張りすぎないという言
葉を読んだときに、頑張りすぎなくて大丈夫だよ
とほっとしてしまう。自分がどの立ち位置にいるの
かなと思う。大人目線でつい…私どっから話して
るんだろうって。家庭訪問して少しでもそのこと話
がしたいと目標を立てた。

協力者 フードバンク日向を立ち上げた。前任校の
子が来るが、学校の姿と違いすぎる。生き生きして
いる。学校にいる自分が腹立たしく思うことを皆さ
んの話聞いて思い出した。学び続けたいと思っ
た。

IV まとめ

協力者 一人一人の子を丁寧にみつめ、教師の姿
勢。子どもの気持ちを表に出すこと。対話をしないと
安心感はない。安心感のためにはまず、大人が自
分を語る。ほんとの気持ちを伝えなければ
ほんとの自分を語る。共有していくことが差別
をなくす取り組みにつながっていく。成長。頑張り
なければいけないのは被差別の側だけなのか。じ
ゃあ周りの人間は。できるようになることだけがい
いのか。差別の解消、無くすのか残すのかしかな
い。

ゴールが目の前ではなくて目のまえに目標を。自
分を見つめて振り返り、子どもたちから学ぶ。

2日目

I 協力者より1日目の振り返り

1日目は

- マイノリティの側が頑張らないといけないのか。
- 本音や願いを子どもや引き出すことが大切。
- 引き出すのは無理やり言わせるのではなく、教
師自身が子どもの背景を丁寧に読み取り、いえる
集団作りが必要。

が確認された。体制や理論に終始せず、子どもと重
ねた討議をしていきましょう。また、各地の実践は
違いがあることを考慮してほしい。

【会場からの基調に係るご意見への返答】
資料集56ページの「1. はじめに」1行目からの部
分★民主主義ではなく、「民主教育」

II 報告及び質疑討論の概要

—報告3—④

外国につながる子どもたちへの支援 ～神奈川の
夜間定時制高校の現状報告から～(神奈川県人教)

—主な質疑と意見—

協力者 外国につながる子どもの割合とどの国か
ら？

報告者 2割。コリアンが川崎に、中国人が横浜な
どに集まって住んでいることが多い。インドシナ難
民を定住させるセンターがあることも特徴的。工場
が出来るのを機にフィリピンから村ごと引っ越して
くる。スリランカ・バングラディッシュ・ネパール等、
県内全域に様々な国から移り住んでいる。

鹿児島 鹿児島も外国につながる子どもが増えて
きている。父親母親とも中国籍で、子どもが一番日
本語が堪能。子どもが不登校になって家庭訪問に
行くと親は仕事が忙しいことが分かった。保護者が
仕事で忙しくしている家庭が多く、トラックの運転
手の兄と連絡を取ったりする。その際、言葉の壁を
感じるの、どんな風にされているか。

報告者 子どもと親は分ける。子どもは日常会話
を覚えるが、勉強に使う言葉は3年生以上の言葉
を粘り強く教えていく。目で見て見えるものが多い
のが小学校1, 2年生。外国につながる子どもにか
かわらず10歳の嫌々期の子は高校に行くとしんど
い。そういう子たちに小学校の熟語をやり直すと
学力が向上する。就職の際にも同じ。大人に関して
は通訳の確保が一番大事。神奈川は通訳の料金が
安い、謝金となっていて通訳代にはなっていない
ので県外に流出してしまうのを懸念している。翻
訳アプリも利用しては。外部との連携するの
もいい。

鹿児島 前任校で全く日本語をしゃべれない子ど

もを受け持った。レポートに「生徒の自主性を重んじて」とあるが、その意図を聞きたい。

報告者 面倒見の悪い先生が使っている言葉。なんとなく入学した子もいることは承知しているが、自分の意思で休んでいるんだろうと思う先生もいる。裏の見えないところを見ないといけないと思う。

鹿児島 ダイレクトハイティーンの子と日本の生徒とどう交流しているか

報告者 別室にとりだすので、交流が少ない。子どもたちが交流すると、ゲームを持ってきて一緒にやるとか、推しを開設するとか、私たちにないアイデアが出てくる。日本語の翻訳教材を広げると、分かり易く子ども同士で教えあう。行事でも切符の買い方を教えたり、ハラルの食べ物を集めたりする。

香川 アイデンティティをどう守っているか

報告者 アイデンティティが揺らぐと安心して暮らせない。「あなたのままでいい」「二つルーツがあるのは素晴らしいことなんだよ」と言っていないといけない。「先生俺って何人？」と聞いてくる子に「使い分けていいんじゃない？でもあなたはあなただから」と言い続けている。ダンスの際、あだ名をつけると3つ目の名前がもらえて、なんにでもなれるんだと感じる子もいる。

協力者 親同士や、親と先生でどうつながっているのか。

報告者 日本の学校を卒業していない保護者は日本の学校は知らない世界。学校に来てくれた時には最大限に学校のことをよく知ってもらうように心がけている。日本語が達者な方がいる一方でそれぞれのコミュニティで話すので、うわさが独り歩きして進路に影響してしまうこともある。日本語教室やフェスティバルをする活動なども多くある。

協力者 地域の理解は？

報告者 相模台高校は工業高校だったが、地域の方は文化祭など、多く来る。たこ焼きはカレー味の看板をネパール語でアピールしたり、エンパナーダ風などいろいろあり店を出したりしてもらう。悪いことをする子もいて批判もある。同じ敷地内の夜間中学校と避難訓練をしたりする。

鹿児島 以前勤めていた学校で生徒指導が大変な学校にいた。退学・転学をすすめる時、他の子の進路保障はどうなるのかという葛藤を感じる。

報告者 たとえ退学転学をしても、気にかけてもらっているという経験をすることに意味がある。どれだけ関わっても無駄ではないと思ってやっている。タバコ、飲酒、につながる先輩との縁を切った方がいいということで、そういう子を地方に飛ばすNPOに相談したこともある。でもそこから通ってくるその子は高校にも入れなかったが電話で現状を報告してくれてかわいいなと思う。関わってよかったなと思う。こういうことに時間をかけるのを批判する先生もいる。

鹿児島 「普通」に縛られた生き方をしてきたし、子どもたちを「普通」で縛ってきた。異動直後は先生

たちと語れない自分がある。学校の先生たちの「普通」に講じきれない。これが多数派にならないかなと思う。「普通」という壁の中で高校の先生方にどう伝えているか、どんな苦労があるか教えてほしい。

報告者 楽しいことが多かった。多文化交流を楽しもうと言ってその姿を見せようとしている。資料にあるように「日本語教育を達成させるべきだ」といった先生が、文化祭で子どもから提案されたクーリという食べ物に興味を持ってくれた。楽しいと思えることを見せるのが一番手っ取り早い。

大阪 中国籍の子どもが増えていると感じる。1年生の入学式の時、入学のお知らせに書かれておらず、服装がジーパンにクロックスで来るなど、意図したわけではないが責任を感じることもある。情報過多で伝えたいことがぼやけることも心配だが。細かいニュアンスまで伝えようとすると伝えたいことがぼやけるという失敗談があるか。

報告者 失敗もした方がいい。ジーパン、クロックスでもいいじゃない。式典は華々しいが、小学校の時に同様の失敗をした子もいた。子どもが困らないようにしたらいい。「お前の親あんな格好してきて」といわれるような、マイクロアグレッションを「そうじゃない！」と瞬時に伝えないといけない。「中国嫌い」と言う子に「なんとなく言わないで！」とすぐ伝える。後で聞くと、「親が言ってるし…」という子に「そんな考えは自分を狭めるぞ」と伝えている。その場で注意するけどアフターフォローもするようにしている。病院で名前を呼ばれるのが嫌とか、変わらなければいけないのはマジョリティの方で、私たちが汗をかかないといけない。長い目で見れば些細な失敗だからアフターフォローのほうが大事。

—報告4—③⑧

「正しく知って 正しく行動する」(鹿児島県同教)

—主な質疑と意見—

香川県 自分自身もハンセン病のことを実践している。宿泊拒否事件には本質的なことがあるのではないかと思っている。

報告者 国民がすでに分かっているはずの時期に起こったことなので、感染するということことが分かっているのに拒否をすることに子どもも怒りを感じていた。その後の手紙の投函事件「立場をわきまえろ！」という点についても、中身についても当然だが、上から目線ということに怒っていた。

鹿児島 第5次6次の授業は、子どもたちが何をしたか。

報告者 グループをテーマに沿って分け、調べて発表の準備をする。

香川 子ども自身が自分自身も差別者であるという気づきはあったか。

報告者 この時間ではそこまでは行きつかない。私も「患者狩り」をしてきたと正直に話す。

「温泉という場」ということでの差別事件があったが、子ども達に「後遺症がある人」ということで問うと固まった。

協力者 部落問題学習をしている中で「なぜ差別をしてしまうのか」と問うと深まる。

鹿児島 30年前にいた学校で取り組んでいる。差別はいかんといいいながら、自分の差別意識の気づきはあるか。

報告者 園の中で出されたお茶を飲めないというのはよく聞く。自分はそのようなことはなかった。正しく理解していたので、逆に嬉しかった。宿泊拒否事件のオーナーは、菊池恵楓園に謝罪に行った時のことの経験。もういいのにと思ったが、マジョリティ側にいた自分に気づいた。

鹿児島 社会の教員をしている。ハンセン病のことは知っていた。話を聞くので、怒りや悔しさと共に、自分への憤りから同和教育に従事した。ある中学生の話。母からここで「息をしちゃだめだよ」と言われていた。学習後に母と話す「ばあちゃんに言われたから」という返答に喧嘩をした。子どもの生活ノートから「ハンセン病ということ知らなかった。なぜ日本で起きていたのか。知らせていきたい。」鹿児島県同教の作成資料。伝えることは大事。正しく知り、学び、行動するにつなげる。

協力者 善意が差別を生む。

鹿児島 自分の受け持った例として、特定の子どもの差別的な言動をする子などがいた。教師の思いが伝わっていないような気がしている。気付かせるための声掛けなどの支援方法を教えてほしい。

報告者 会場がみんな知りたいこと。この教室にいる人は、無条件で大切にされる。先生に忖度して頑張ろうとする。人はそれぞれであるということ伝えていく。そこから子どもたちがつながる実践をしている。対話を深める、繰り返すことが重油。共感していく。

協力者 人権→友達や周りの人を大切にすること。子どもが本年を言い出したくなるような「引き出す」仲間づくりの実践をすることが重要。

Ⅲ 総括討論

鹿児島 大谷さんに。人権・同和教育の学習の場なので。人権は当たり前だけど「なんで俺にはないんだ」など『叫ぶ』ことがスタートだと思っている。「俺は何人なんだ？」のような叫びはほかにありますか。

報告者(神奈川) 日本は名前、戸籍など日本人じゃないと思い知らされてしまう国になっている。仕組みももちろんだが、国と国が仲悪くても市民同士は仲がいいと伝えられればいいと思う。かわいそうな外国人の話をしてよと言われるけど違う。かわいそうな話を聞いても根本的な解決にはならないと思う。

報告者(鹿児島) 居場所づくり。授業をうけず他の子に攻撃を繰り返す。このクラスではだれでも大切にされると徹底的に繰り返してきた。その子がなん

かおちついてきた。彼の居場所が出来たのではないかと思う。その子はお礼の手紙を書いてくれた。しんどい、攻撃した方が馬鹿にされないと思っていたのだと思う。子どもを指導する前にまず子どもを知ろうと思う。

報告者(大阪) 本に載っていないということを授業の初めに見せて、子どもの意見を言ってもらうようにしている。子どもたち同士で言い合うようにしていると、子ども達から楽しいという声が聞こえてくる。そうすると前向きに次の授業を楽しみにしてくれるようになった。

報告者(香川1) 落とし物を取ってくれないというトラブルがあったが、「そんなことで喧嘩はしません」と言ってしまった。「僕たちからしたらちょっとしたことじゃない」と子どもから言われた。自分と子どもの考えは違う。自分のことを認めてくれないことがあると子どもは閉ざしてしまうんだと思う。

報告者(香川2) 多様性やハンセン病、みんな違ってみんないいと話すが、髪形など指導しないといけないときがある。そういう時にラインをずらしてしまうと…という先生の見解もある。私たち自身が当事者として考えられない部分がある中で、出会いが大事だと思う。自分の出身に地区がある。そのとき一緒に遊んでケガしても親は何も言わなかった。40年くらい前、男の子が好きな男の子がいたり、大学時代パキスタンの人と出会ったり、不法労働の人と出会ったり、経験がある。子どもたちは自分たちと見た目が違う人が来た時にざわつくが、子どもは正直なところがあるので、私たちは一緒に考えたり伝えたりしないといけない。その子を認めると他の子がしんどくなることもあるので、その場だけでなく、いろいろな場所で支援や配慮をしないといけないと思う。

鹿児島 今年度総合的な学習の時間でハンセン病、水俣病7時間。濱田さんにも意見を頂いた。大事にしたのは出会いから自分を見つめる。上野雅子さんの紙芝居を使って知る授業。水俣病患者のながいさん、水俣のかとうさんの話を聞いた。今年度は2校で来年は3校でこの実践を行っていく。広がってほしい。部落問題学習6年7時間。「部落解放」の4月から5月号で部落問題が無くならないのは問題があるのでと書かれていて共感した。自分たちの部落問題の課題は何だろうかとか4人の方に聞いてみると、地域の方は答えてくれた。荒い態度を見て、やっぱり居酒屋で部落の人は怖いという話を聞いた。子どもたちに宛てて手紙を書いてもらった。語り合うことで少しずつ差別をなくしていくことについての内容だった手紙を子どもたちに伝える授業を計画している。

鹿児島 荒れた学校に赴任した。その当時のスーパーティーチャーが押さえつけていて、その先生が異動したことが影響したのだと思う。力で抑えては絶対ダメだと思う。2年生徒指導のとき、生徒に胸ぐらをつかまれ、たばこの煙をふきかけられ、「お前たちボンボンに俺たちの気持ちかわかるか！」と

言われた。思春期の一番大事な時に親の愛情を受けていなかったのだと思った。一言も返せなかった。別の学校で、生徒会室のカーテンに2年生の子が火をつけた。そのまま少年院に入った。3年生の夏休み、たまたま自分のクラスを通った時「よく帰ってきたね」というと、「小田原くそ死ね」と言われた。ブロックを投げつけられたこともあった。その子は5歳で妹とお母さんが交通事故で亡くなっていたことを後に知った。報告を聞いて、一人一人の状況を何で荒れるのか考えることができなかった自分のことを思い出した。社会の授業の後に賤称語を使った事象があった。それを機に総合的学習の時間に1年生4時間、2年生3時間、3年生は2時間部落問題学習に力を入れるようにした。

ハンセン病問題に関しては、星塚敬愛園上野正子さんにも来ていただいた。回復者の方に来ていただくことはできないが、星塚敬愛園に連絡すれば、講師を派遣してくれる。ぜひ電話を。教育課程にも位置付けていただければと思う。

協力者 濱田先生、部落問題学習について言い足りなかったことは？

報告者(鹿児島) 課題について2つ話したい。1つ目は授業実践を広げるとのこと。紙芝居、パワポを使ってもらっている。部落問題学習、ハンセン病問題についての学習で、まず教員自身が学んでほしい。もう1つは継承。伝えていく先生たちの集まりも、回復者も高齢化していることはいずれいなくなるということ。回数が必要だと思う。伝え方を学んでいくことも大切だと思う。中学生の次男が「正子さんたちはヒップホップだよ」という。黒人の非暴力、被服従の主張を叫ぶまさにヒップホップだと私も思う。理解される言葉で伝えていくことが大切。

協力者 報告者から一言ずつお聞かせください。

報告者(神奈川) 連帯するというのは大事だと今回参加して学んだ。濱田先生も頑張っているなとわかると。心の叫びについて、マイクロアグレッション(カタカナの名前を見て「日本語大丈夫ですか」と聞いてしまうなど)が積み重なってストレスを感じる。質問し合うレク交流で「好きな女の子のタイプって何」という質問が出たが、好きになるのが女の子と決めつけないでと伝えたら、偶然言われた子は男の子が好きな男の子だったので感謝された。マイノリティは気にしなくていい存在だという人もいるが、「気にする存在」に自分たちがしていかないといけないと思う。コリアンの方の講演で「あなたが差別をしないだけでは差別はなくなりませんよ」とあった。反差別ブレーキ、マイクロアグレッションをつぶしていく、偏見をなくしていく、いろんな子の声に耳を傾けていかなければいけないと思う。

報告者(鹿児島) 課題についての進捗状況。この会場でも実践を伺え、心強い。子どもたちが生きやすい世の中をつくっていくことにつながると思う。わが子は将来新聞記者になりたいと思っている。抑圧された人の声を伝えたいと話す。若い世代に

伝わっていて「やってよかったな」と感じる。退職までに息子が講師として声なき声を集めた公演をしてくれたらと思う。

報告者(大阪) 2年前のことを思い出すことができた。他の報告、討議を聞いて、もしかしたら僕の行動で傷つけてしまった子がいるんじゃないかと感じた。考えるって大事。そこを見つけれたり、それに対してどうしようと模索することが教員の醍醐味。そのために子どもたちが安心する居場所づくりが大切。勉強になったし、実りある経験になった。ありがとうございました。

報告者(香川1) いい出会いができたと思う。自分自身本音で話せてなかった。大谷先生の「あなたはあなただから」は、一人の人間として見てくれて、とても救われる言葉だなと思った。

報告者(香川2) レポートを作成する中で多くの人と一緒に考えていくことができた。けんさんのお母さんが、「今だったら安心して入っていけると思います。」とあった。僕たちの活動が間違っていなかったんだと思う。

IV まとめ

協力者 香川の報告について。子どもの思いを大切に言葉で大事にしたいという報告だった。教師の介入がなくても言い合える。今どんな気持ち、相手はと考える子どもたち。自分はどうすればよかったのかをトラブルから学ぶことにつながる。安心して生活することができるよう、細やかに取り組み続けることが確認できた。人権・同和教育はすべての場面のできる。推進者の意思さえあれば。明確な課題意識を持ち続けたい。大阪の報告について。心のノートを通じて本音と向き合う実践が報告された。秘密のやり取りは本当の気持ちを先生とやり取りできる。本当の気持ちに迫る方法が交流された。教師が自分を見つめて交流すること、大人が子どもから学ぶことが確認された。教師がまず本音を出すために、自分を見つめて伝え続けること。背景をとらえ、仲間をつくることが大切。神奈川の報告について。自分のことを理解してくれる存在はその子の生きる人生にかかわる。夜間定時制高校で、それでもやり直せると信じ、一人一人を名前で呼ぶ姿勢は家族にも伝わる。せっかく出会ったのだから、無駄なことは一つもない。25歳になった教え子は「先生に会うのは最後や」といった。それくらい先生は最後の砦や。わたしのことこんなに考えてくれたんは先生だけや。変わるのマジョリティ。同和教育は関わることでしかえられない宝物。鹿児島島の報告について。ハンセン病問題を通し、自分を見つめ、差別性と向かった報告。しんどい部分から目をそらさない同和教育の原点に立ち返った。どの子も必ず大切にされる、あなたが大好きだよというメッセージは大人だって嬉しいメッセージ。発信し続ける自分でいたい、自分もまたエネルギーで満たされないといけない。それはこういう仲間とつながることで得られる。あらゆる差別の

解消。自分が差別しなければ差別はなくなるわけではないなら、継承していかなければならない。自分のいるその場所で、私にしかできないことがきっとある。それぞれがそれぞれでがんばっていると思って、エネルギーにしていきたいと思う。